

『狭衣物語』の〈幼さ〉についての一考察

——嵯峨院女三の宮をめぐる——

塩見香奈

はじめに

『狭衣物語』には、五人の齋王が登場している。齋院は、狭衣が想いを寄せている従妹・源氏の宮、狭衣の妻である一条院一品の宮、狭衣の婚姻譚に登場する嵯峨院女一の宮の三人である。そして齋宮は、狭衣の母である堀川の上、姉の女二の宮の代わりに狭衣への降嫁が期待されていた嵯峨院女三の宮の二人となっている。いずれも主人公・狭衣との関わりが深く、ストーリー展開にも密接に関わっている存在である。

後一条帝代の齋宮となる皇女・嵯峨院女三の宮は、狭衣の即位を決定付けた、天照大神の託宣を行った齋王である。だが、そのように重要な役割を担う存在である一方で、作中に登場する五人の齋王の中でも、その人柄を窺い知ることが出来るような人物描写は極端に少ない。彼女の存在が最も強調されるのは天照大神の託宣場面であり、退下した後の生活や行く末などは語られぬまま、物語は結末を迎えている。

女三の宮の登場場面はさほど多くはなく、彼女の人柄や心情などは断片的にしか語られていないが、本稿では齋宮卜定以前の、嵯峨院皇女としての女三の宮像について―巻一、巻二の描写をとりあげ、特に巻二における女三の宮の〈幼さ〉を中心に考察していきたい。卜定条件である「未婚の皇女」という立場上、齋王には〈幼い〉という性質が生じやすい傾向にあるが、それを踏まえただ上で、女三の宮の幼さ、幼稚性がどのように描かれているのかを確認していきたいと考えている。また、今回とりあげる場面において、本文の異同が激しい箇所についてはその比較を行い、女三の宮の描写にどのような変化が生じているのかも検証していきたい。¹⁾

一 巻一、巻二前半における女三の宮の描写

嵯峨院女三の宮の存在は巻一の時点で知る事が出来るが、皇太后宮腹の皇女が三人おり、女一の宮は齋院であること、女二の宮は父帝に寵愛されており、天稚御子降下事件の恩賞として狭衣へ

の降嫁を決められたことが語られるのみとなっており、次の如く女三の宮についての記述はない。

皇太后宮の御腹の姫宮、三所おはします、一はこの頃の齋院、二は御容貌、心よりうち始めて、ことわり過ぎてめでたくおはしますを、上は、とりわき限りなく思ひかしづききこえさせたまひて、世の常の御ありさまなどに思ひかけざりつれど、

〔新全集〕①・四六頁

「姫宮、三所おはします」と語られていながらも、その詳細が語られるのは二人の姉宮のみであり、末の女三の宮がどのような人物であるのかは、この時点では全く想像がつかない。そして、その後は女二の宮降嫁に乗り気でない狭衣の様子や、従妹である源氏の宮への告白とその拒絶、飛鳥井の女君との出会いと別れなどが描かれ、巻二の垣間見の場面へと繋がっていく。

ここで注意しておきたいのは、巻一の該当場面において〈三人の嵯峨院皇女が存在する〉ということ、女三の宮についての詳細が描かれないことは、『大系』（内閣文庫本）や『新全集』（深川本）など、第一系統とされる底本において指摘されているという点である。また、異本系統の本文を各区分ごとに並記している『全註釈』を確認したところ、第二系統とされる為家本にも三人の皇女が存在を確認できる。「皇太后宮の姫君たちは、三所おはします」といった説明の後に女一の宮が齋院であることが語られるのは第一系統と同様であるが、「今二所は、御かたちなどすぐれさせ給へる。目も放ち聞こえさせ給はず、かしづき聞こえさせ給ふ。」という描写の後に、中でも女二の宮は優れている、という女二の宮賛美につながっている点が第一系統とは異なる。女二の

宮とあわせて語られている為、女三の宮個人についての言及がなされていないという点は第一系統とかわらないが、女三の宮の容姿も女二の宮同様に優れていること、大切に育てられていることなどが語られている。

この場面において、第一系統と大きく異なっているのが第三系統―『全書』（古活字本）、『集成』（春夏秋冬四冊本）などの流布本（古活字本）系統であり、嵯峨院皇女が三人いるという記述は見られない。

●『全書』

皇太后宮の女二の宮の御かたち心はせ、ことわりも過ぎておはしますを、いみじう愛しきものにし奉らせ給ひけり。一の宮はこの頃齋院にておはします。后もこの宮をば類無く思ひかしづき聞こえさせ給ひて、世の常の御有様など思しかくべくもなきを、

〔全書〕上巻・二〇五頁

●『集成』

皇太后宮の女二の宮の御かたち心はせ、ことわりも過ぎておはしますを、いみじうかなしきものにしてまつらせたまひけり。一の宮はこのごろ齋院にておはします。后もこの宮をば類なく思ひかしづき聞こえさせたまひて、世の常の御有様などおぼしかくべくもなきを、

〔集成〕上巻・三四頁

引用場面について、『全書』と『集成』は右のとおりほぼ同一の内容となっており、女二の宮が父母に鍾愛されていること、女一の宮が齋院であることが語られている。女二の宮と女一の宮に

関する記述は、第一系統・第二系統と大きな違いは無いように思われるが、第一系統と第二系統はここで語られていない三人目の皇女・女三の宮の存在も示しているのに対して、第三系統からは、嵯峨院には女一の宮、女二の宮という二人の娘がいるという情報しか読者には伝わっていないことになる。

女三の宮についての情報は、第二系統から僅かに得る事が出来るという点ではやや違いがあるものの、三系統とも、女三の宮個人についての詳細が記述されていないという事実が変わりはないと思われる。だが、その後の展開と、それに対する読者の印象に関しては僅かな差が生じるのではないだろうか。狭衣が初めて姉妹の姿を目にする垣間見の場面、「帳の前に二所寄りふしたまへり」という描写を、第一系統や第二系統のように「三人の嵯峨院皇女が存在する」という設定を把握した上で目にする場合には、「斎院である女一の宮を除いた、女二の宮・女三の宮姉妹であることが予想できる。特に第二系統の場合は、姉妹二人の特徴としてその美しさや愛育されている様等について言及されていた為、もう一人の姫君が女三の宮であるという予測が付きやすいと思われる。一方、第三系統の場合は、一人は女二の宮であることは予想できるが、もう一人の姫君が誰であるのかは、作中で「三の宮」と明確にされるまでは分からず、女三の宮の存在自体も、この垣間見場面において初めて読者に示されるといことになる。読者の視点から見て、登場人物の構成・設定の把握がし易いのは第一系統、第二系統であろう。しかし、もう一人の女性是谁なのかと関心を抱かせ、女三の宮の存在をより読者に印象付けるといえる点では、第三系統の構成も効果的であるといえる。

続いて、狭衣が女三の宮の姿を目にする場面について確認していききたい。狭衣が女三の宮と接触する機会があったのは、①巻二において女二の宮・女三の宮姉妹を垣間見した際と、②出家した女二の宮のもとへ忍びこんだ際の二回だけである。その際、女三の宮は美しさを感じさせるものの、まだ幼さが残り恋愛対象にはならない女性として認識されていた。

①、姉妹を垣間見た際の描写。

「その絵、など見せざりける、心憂かりける」と恨みたまふ
けはひ幼びて、ふくらかに愛敬つき、うつくしげにぞ見えた
まふ。

〔新全集〕①・一七〇頁

②、出家した女二の宮のもとへ忍びこんだ際の描写。

やをら起きあがりたまふに、奥のかたには三の宮の臥したま
へるなるべしと、御髪の手にあたりていぎたなげに見たまふ
もうらやましきに、いまぞうちみじろきたまふ。ありしなが
らの我なれば、総角もいかがあらまし。うつくしかりし御顔
はふと思ひ出でられたまひけり。

〔新全集〕①・二三七―二三八頁

①の場面において、狭衣が姉妹を垣間見た際は、狭衣の噂（天稚御子降下事件）に反応を見せる女三の宮の様子が描写されており、幼さや愛らしさを感じさせる姫君と評されている。また、②の場面では、出家した女二の宮のもとへ忍びこんだ際に、狭衣は「いぎたなげに見たまふもうらやましき」―髪に触れられてもお熟睡できる女三の宮がうらやましい、と評している。これらに

ついで、以下で詳しく見ることにする。

二 垣間見の場面

まずは、先の①の垣間見の場面に注目してみたい。源氏の宮への想いが報われないのであれば、と出家を望んでいる狭衣は、女二の宮との縁談に乗り気ではない。降嫁の話がすすめられている中、中納言典侍を訪ねて弘徽殿にやってきた狭衣は、女二の宮・女三の宮姉妹を垣間見ることとなる。

この垣間見の場面では、「幼びて」という語が使われている。「狭衣物語」において〈幼い〉という語が用いられている場面を見ると、狭衣の子である若宮、飛鳥井の姫君などに対して「幼き人」という表現が使われており、主に幼子を指す場合に用いられる傾向があるように思われる。この時点での女三の宮の年齢は不明であるが、垣間見の際に、
帳の前に二所寄りふしたまへり。火の影ほのかなれば、いづれかいづれとも分かれたまはず。
〔新全集〕①・二六八頁

という描写があり、暗くはつきりと見えない状態では姉妹の判別がつかないという事から、姉妹の身体の大きさ等については極端な違いがないように感じられる。身体的な差が目立っていないのであれば、年齢もさほど離れてはいない可能性がある。女三の宮が妙齢の皇女であるとするならば、ここで用いられている「幼びて」は、子どもに対する語とは異なる意味を有していると見なすべきであろう。

また、この垣間見の場面は、巻二後半において女三の宮の降嫁話があちがあつた際に、狭衣の心内描写として次のように回想されている。

嵯峨の御わたりのころかたに三の宮迎へきこえてんと思したちて、齋宮のおはしましつる跡をいとは磨きたてさせたまふに、大将、ありし世、夜目にもしるく用意ありさまの気高う、心苦しきところなどはよなく劣りたまひしものを、さばかりあかぬことなく、何ごともこれこそはかぎりなき御さまなめれと、
〔新全集〕①・二六四頁

「ありし世」は、①の垣間見の場面を指しているだろう。姉の女二の宮に対しては、「夜目にもしるく用意ありさまの気高う」と、申し分ない女性であること、器量のよさなどが賛美されており、女三の宮はその姉と比べて「器量が劣る」と評されている⁵。一連の描写からは、申し分ない女性であった女二の宮でさえ源氏の宮への想いから結婚まで至らなかつたものを、その姉に劣る女三の宮と結婚などできようか、という狭衣の想いがこめられていることがうかがえる。

この回想場面については、第一系統、第二系統の間では大きな違いはないが、第三系統の『全書』と『集成』は、「かのありし夜目にもしるく、よなく劣り給へりしものを。」となっており、第一系統・第二系統にあつた「用意ありさまの気高う、心苦しき」という表現が見られない。『全書』では、「女三宮の容姿は女二宮よりも格段に」と解釈されており、『集成』は、「あの晩（夜目にも）はつきりと、格段と劣っておられたのに」と、何を基準に優

劣を判断しているのか明確には記述されていない。第三系統に関しては、優劣の対象となる事柄が明確に描かれていない為、『集成』のようにその対象を明確化しない場合や、『全書』のように容姿の優劣と解す場合など、複数の解釈が存在していると考えられる。

①の垣間見の場面では、「ふくらかに愛敬づき、うつくしげにぞ見えたまふ」と女三の宮の愛らしさが語られてはいたが、容姿に関して女二の宮との比較はされておらず、②の寝所に忍びこんだ場面では、「うつくしかりし御顔」と語られている。そこから考えると、女二の宮に比べ、幼さは残るものの、容姿が格段に劣っていたとは断言することはできない。容姿についてではなく、心遣いや様子といった、器量についての優劣であると示している第一系統、第二系統の表現の方が、優劣の対象が言及されていない第三系統よりも妥当であると思われるところだ。第一系統、第二系統の表現から見ると、女三の宮の比較対象として女二の宮の器量の良い・優れた女性という面をあげており、その結果、女三の宮の幼さが強調されていると考えられるのである。

次に、女三の宮のように、子供と言える程の年齢ではない女性に〈幼さ〉が用いられている例について確認していきたい。『狭衣物語』に登場する女性の〈幼さ〉としては、今姫君についての場面があげられる。

この君は、年になりたまひにけれど、御心ばへは、あまりおほめきすぎて、心幼く、ものはかなげにおはしける。

〔新全集〕①・一〇一頁

今姫君は二十歳であるという記述があるので、十代と推測される女三の宮や、〈幼い〉という語が用いられている子供たちと比べると、やや高めの年齢である。これは洞院の上が今姫君を養女として引き取った際の描写であり、年齢にそぐわない幼さを見せる今姫君のことを、洞院の上は心もとなく思っているという事が語られている。一連の描写について『新全集』では、

今姫君の「おほめきすぎ」という性格は、環境の変化によつてもたらされた「ほれほれし」「うつし心もなし」という心情と結びつくものであり、必ずしも生来的な欠点というわけではないという。語り手の今姫君に対する好意的な姿勢に注目したい。

と指摘されている⁸⁾。実母や乳母に先立たれ茫然となっていたところに洞院の上に引き取られ、生活環境が一変したことが、今姫君のほんやりしている・幼稚で頼りないという描写に影響していることがうかがえる。

①の場面の女三の宮は、年齢や幼さについての語り手の評などが明確に描写されていなかった。それに比べて、この場面の今姫君の場合は年齢が明確に描写される、幼さが描写されるにあたりしっかりとした理由付けがされているなど、細やかな配慮を行っているように思われる。

その他に〈幼い〉という語が用いられているものとしては、道成の求愛を拒み続ける飛鳥井の女君に対して乳母が言った、「己が身をとぎまかうぎまに責めたまふよ。かかる人の、物いたう思ふは、忌むなるものを。平らかにして命あらば、忘

れがたう思すらん人にも逢ひたまひてん。いとかく心幼き人や、世にははべる」など、言ひ聞かすれど、

〔新全集〕①・一五〇頁

という台詞があげられる。

求愛を受け入れない飛鳥井の女君への興味が薄れつつある道成は、別の女性のもとへ通うようになった。それを聞きつけた乳母は、道成の関心を再びこちら側に向けようと、飛鳥井の女君を説得する。その説得の際に、無事に出産して生きながらえれば狭衣と再会する機会もあるだろうと述べ、このように「心幼き人」は、またと世間にいるだろうか、と言ひ聞かせている。なお、乳母は狭衣が中納言であるとは知らず、檢非違使長官の子の少将であると認識している。乳母から見れば、身分はあつても経済的な援助が期待できるかどうかも定かではない貴公子に一途であり、多少身分は劣つていても援助が期待できる道成にはなびかないという、飛鳥井の女君の気持ちを理解できないという状況で、このような説得に至っている。

この場面での「心幼き人」は、深川本系統である『新全集』では「考えの浅い人」、同じく深川本を底本とする『全註釈』では「考えが未熟な人」と訳されている。また、第三系統では「いと心幼くいふかひなき人の御心は」という描写になっており、『全書』は「ねんねでお話にもならぬ姫君の御心」、『集成』は「姫のようにまったくの子どもでいくら話して聞かせてもわからないよなお心の人は」という解釈がなされている。

『新全集』や『全註釈』の「考えが浅い、未熟」な飛鳥井の女君像と比べると、『全書』や『集成』の「まったくの子どもでい

くら話して聞かせてもわからない」飛鳥井の女君像からは、より幼い印象を受ける。第一系統と第三系統の本文の違いがそれらの解釈に影響していると思われるが、妊娠している、道成と乳母の画策によって連れ去られ冷静さを失っているという状況から、乳母に「心幼き人」と評されるに至ったと考えれば、精神面での未熟さを表現している、『新全集』や『全註釈』の訳の方が適切だと思われる。この「心幼き人」は、狭衣を忘れられず、自分の境遇を自覚して最善の行動をとる事が出来ないという、飛鳥井の女君の精神的な未熟さ、幼さを表現していると思えてよいのではないだろうか。

このように、飛鳥井の女君は、妊娠中で精神状態が不安定であり、さらに道成と乳母によって狭衣から引き離されたという状況下で、「心幼き人」と語られていると読むことができた。そして、「心幼し」と評されるにあたり、身分ある狭衣と恋仲になったが故の不安や迷い、狭衣の乳母子の妻になったという話が狭衣に知れてしまつては、という女君の絶望や帥中納言の娘としてのプライド等、様々な状況や女君の心情が根底にあり、それらを乳母が把握できていないことも影響していると考えられるのであつた。

また、この場面の飛鳥井の女君に関する記述からは、先述した今姫君のような、語り手からの擁護的な表現は見られない。しかし、「心幼き人」と称されるに至った理由が、それ以前の文脈から読み取れる仕組みになつているという点では、今姫君の場面でも用いられた〈幼い〉という語の表現方法と似通つていると考えられる。〈幼い〉という語が用いられるにあたり、そのように称さ

れるに至った理由が明確である今姫君、飛鳥井の女君の場合と比べると、年齢も精神的な幼さの理由も明らかにされてはいない女三の宮に、「幼びて」という語が用いられている意図を読み取るのは困難である。

①の場面において女三の宮が「幼びて」と称されるのは、中務宮の姫君が天稚御子降下事件の話を耳にし、その場面を再現した絵を描いたという事に反応してのものである。中務宮の姫君は、天稚御子の姿は本物そっくりに描くことができたが、「大将の御ありさまぞ、すべて及ぶべくもあらぬ」(『新全集』①・一七〇頁)と、狭衣の美しさを筆で表現することが出来ず、最後にはその絵を破り捨ててしまったことが、女房から語られている。それに對し、女三の宮はその絵を何故自分に見せてくれなかったのか、と拗ねているのである。中務宮の姫君が描いたのは天稚御子だけであつたのか、狭衣の姿も途中まで描いていたのかが定かではない為、女三の宮が興味を示した対象が天稚御子だけなのか、狭衣も含めてのことなのかは明確になっていない。

絵を見たかつたと拗ねる様は、確かに幼い態度、子どもらしい欲求のように感じられる。だが、仮にその対象に狭衣も含まれていたとするならば、多くの女性たち、さらには天稚御子でさえも惹かれる狭衣の姿を見たいという女性としての好奇心も混在していたのではないか、という見方も生じよう。しかし、狭衣の目を通して見える女三の宮の姿はあくまで幼く可愛らしい姫君として描かれており、彼女とは対照的に、女房たちの話に参加せず、その様子をひっそりと見守る女二の宮の姿が賛美されている。女三の宮が幼稚すぎるといふ印象はないが、女房たちの噂話に反応

を示さず、落ち着いた様を崩さない女二の宮の方が、より精神的に大人びた印象を受けるのは確かであろう。

先程とりあげた飛鳥井の女君や今姫君についての描写と比較してみると、嵯峨院女三の宮の場合は、彼女を幼いとする理由が明確に描かれてはいないことや、世間一般と比べての幼さというよりも、女二の宮の大人びた様と比較しての幼さが強調されているように感じられ、前者二人の場合とは異なつた特殊なパターンであるとと言える。

三 寝所に忍びこまれた場面

次に、②の場面について詳しく見ていきたい。女二の宮が自身の子を出産したことを知つた狭衣は、皇太后宮(大宮)の死後、女二の宮が滞在する故皇太后宮の邸を訪れる。狭衣は寝所に忍びこむが、その気配を察知した女二の宮は御帳の後ろに隠れてしまひ、狭衣の手元には女二の宮が脱ぎ捨てた衣だけが残つた。その後、若宮の泣き声によって人々が起き出したのを感じ取り、寝所を後にしようとする狭衣の視界に入つたのは、熟睡している女三の宮の姿であつた。男性の気配に気付く事無く寝入っている様など、幼稚性を示す描写が、①の場面と比べて明確であるといふ印象を受ける。

ここで注視すべきは、『全註釈』が指摘している「いぎたなげに見たまふもوراやましきに」という表現は、内閣文庫本・第二系統・第三系統の本文には見られないという点である¹⁾。

②に挙げた『新全集』(第一系統・深川本)は、「御髪の手にあ

たりていぎたなげに見たまふもうらやましきに、いまぞうちみじ

るきたまふ」となっているが、『大系』（第一系統・内閣文庫本）

は「奥の方に、御髪長やかにてさはるは、三の宮にこそおはすめ
れ。うちみじろき給」、『全註釈』（第二系統・九条家旧蔵本）は

「この傍らにおはする人の、御髪をつややかにてあるにも」、第三
系統の『全書』と『集成』は同一の内容で、「御髪の手あたりつ
ややかに長う探られて、今ぞうち身じろきたまふ気色なるを」と
なっている^⑮。

傍線部の、女三の宮の髪が狭衣の手にあたるという表現は全て
の本文に共通しており、中でも第三系統の「つややかに長う探ら
れて」という表現からは、その手触りや豊かな御髪の様子など、
身体描写がより具体的になされている。破線部の身動きをすると
いう描写は第一系統と第三系統に見られる表現であり、狭衣の存
在に気付かず寝入っている様子がうかがえる。深川本にのみ見られ
る二重傍線部の表現は、髪が狭衣の手にあたり、女三の宮が身動
きをするという動作に狭衣の心情が補足されている。女三の宮が
男性の存在に気付かず、姉や狭衣の苦悩も知らずに熟睡してい
るという状況を詳細に描くことで、女三の宮の幼稚性をより強調
するという効果があると思われる。

また、「総角」という語もこの場面において重要な表現である
と考えられる。この寝所の場面で用いられている「総角」は、催
馬楽の、

総角や とうとう 尋ばかりや とうとう 離りて寝たれど
も 転びあひけり とうとう か寄りあひけり とうとう

をふまえたものと考えられており、『源氏物語』の総角巻におけ
る大君と薫の物語との関連性も指摘されている^⑯。

『源氏物語』では催馬楽が数多く用いられているという印象が
あるが、『狭衣物語』における催馬楽引用は僅か四例であり、総
角の描写はその僅かな例の一つといえる。植田恭代氏は『狭衣物
語』の②の場面について、『狭衣物語』における『源氏物語』引
用の一環とみなしており、それを象徴する語として「総角」は使
われている、と論じている^⑰。確かに、『源氏物語』の中君と嵯峨
院女三の宮の構図の類似など、この場面は『源氏物語』の展開を
踏まえていると思われる。だが『源氏物語』の総角巻は、催馬楽
の髪の結い方としての「総角」以外に、紐の結び方としての意も
有するなど、「総角」という語を催馬楽に限らず広義に用いてい
ることがうかがえる。一方、『狭衣物語』の場合は、幼いとされ
る女三の宮に対し子どもの髪の結い方を思わせる「総角」が用い
られる、話の流れから男女の共寝のイメージを連想させるといっ
た点から、より催馬楽に即した描写となっているように思われる。
『狭衣物語』の共寝の場面と、催馬楽の「総角」との関連性につ
いて、もう少し検証しておこう。

②の場面と催馬楽の「総角」との関連性については、「幼童の
髪の結い方^⑱」という面から、髪に触れられてもなお熟睡している
女三の宮の幼さについての描写に繋がる、ということがあげられ
^⑲。子供の髪の結い方といっても、男子の髪型というイメージの
総角が女子にも適用されるのか、女三の宮からそれが想起され

〔新全集〕・一五九頁

うるのか、という点に注目してみたい。

「総角」が男子に限定されるのか、女子にも適用されるのかという点については、中田幸司氏が先行研究を踏まえた上で、男子の髪型とする用例が多く、女子に限定する例を見出すことはなさそうだという事、女子の髪型とする理解は『毛詩』の用例にもあり、まったく宮廷内部にもたらされていないかとは断定できないが、確固たる認識の根拠もまた示されてはおらず、『催馬楽』ではどのように理解されることが相応しいのかを改めて考えるべきである事を指摘している。また、中田氏は「総角」が文献上においては宮廷内部の男子に使用される例が多い事、後世では男女どちらかに限定することはほとんどなく、どちらの可能性も残しているという両義性を持たせるところに歌謡の性質を見出すことは出来るとした上で、「だが、これがいわゆる成人前の子どもの所作であることと、結果として共寝を導いたことこそ『催馬楽』

「総角」の主題が見出せるのである。」と論じている。

こうした説から、現状では女子に対しても「総角」という語を用いてよいと断言することは出来ないが、その可能性があったことも考慮する必要があると思われる。「総角」が女子にも用いられる語だと仮定するならば、女三の宮が狭衣の侵入に気付かず無防備に寝ている様、狭衣が触れた女三の宮の髪感触等から、子どもの所作や、幼童の髪型である「総角」を想起したという事になるのではないか。また、『狭衣物語』の場面では「寄りあふ」等の語は直接用いられていないが、「ありしながらの我なれば、総角もいかがあまし」という描写から催馬楽の共寝・男女の睦みかわすイメージに結びつき、かつての自身（狭衣）であれば女

三の宮に手を出していたかもしれない、という狭衣の心内描写に繋がると思われる。これらの考察から、②の寝所の場面は、『源氏物語』の総角巻の引用という面もあるものの、女三の宮が狭衣の侵入に気付かず無防備に寝ている様、狭衣が触れた女三の宮の髪感触等から、催馬楽の「総角」における子ども所作、幼童の髪型である総角、男女の共寝のイメージなども有していると考えることが可能ではないだろうか。

一方で、姉妹の寝所に忍びこむ男・逃げる姉・熟睡する妹という構図から見ると、嵯峨院女三の宮は、『源氏物語』でいえば大君よりも中君の位置付けに近いと考えられる。②の寝所の場面における女三の宮の「いぎたなげに見たまふもوراやましきに」という描写が、『源氏物語』に登場する中君の、「何心もなく寝入りたまへるを、いといとほしく」（『新全集』総角⑤・二五二頁）に相当すると思われる。女三の宮の場合は狭衣からの評であり、男性に寝所に忍びこまれても、気付く事なく熟睡している女三の宮をうらやましいと思う気持ちが語られている。一方、中君の場合は姉の大君からの評であり、危機的な状況にありながらも、気付かずに熟睡している妹を案じる様子がかがえる。また、中君については目を覚ました後の、

いますこしうつくしくらうたげなるけしきはまさりてやとおぼゆ。あさましげにあきれまどひたまへるを、げに心も知らざりけると見ゆれば、いといとほしくもあり、

（『新全集』総角⑤・二五三頁）

という描写がある。愛らしく可憐な様子が姉に勝っていると評さ

れていること、状況を把握できず茫然としている様など、愛らしさ・可愛らしさが強調されており、大君に比べ幼い印象を受ける。『狭衣物語』の嵯峨院女三の宮は目を覚ました後の描写はないが、②の場面の、

ありしながらの我なれば、総角もいかがあらまし。うつくしかりし御顔はふと思ひ出でられたまひけり。

〔新全集〕①・二三八頁

という描写から、狭衣から幼いながらも魅力のある女性と認識されていることがうかがえる。姉に比べ幼さが残るが、愛らしさ・可愛らしさといった魅力も描かれているという点において、嵯峨院女三の宮は『源氏物語』の中君と同様の性質を有していると考えられる。このように『狭衣物語』と『源氏物語』を比べると、起きて男性の存在に気付くか否か、姉の妹に対する想いの描写があるか否かという違いはあるものの、姉妹の寝所に男が忍びこみ、その事に気付き逃れる姉と熟睡する妹という構図では似通っている。その意味で、『狭衣物語』が『源氏物語』の展開を踏襲していることがうかがえる。

こうした狭衣と『源氏物語』の薫との関連性について、本橋裕美氏は、

しかし、狭衣の行動は薫をなぞるわけではない。狭衣はそこに眠っているのが女三の宮であることを自覚しており、またその可愛らしさを垣間見て知りながらも手を出そうとはしないのである。『総角』の語は、催馬楽の共寝のイメージ、『源氏物語』総角巻の薫の行動との対照、更には童髪を表す『総角』という言葉から狭衣の侵入に気づかず眠る女三の宮の幼

さをも連鎖させながら、「まろびあひけり」「か寄りあひけり」という催馬楽の言葉を否定する。もちろん、薫が中の君に手を出さなかったという点では狭衣もまたそれに倣ったともいえるが、女三の宮がこの一夜を一切知らないことは狭衣との関係を見る上で押さえておくべきである。

と論じており、『源氏物語』の流れを踏襲しつつ、薫とは異なる狭衣像が描かれていることが指摘されている。本橋氏の論のように、取り残された妹には手を出さないという展開は確かに『源氏物語』を踏襲していよう。ただし、嵯峨院女三の宮の場合は、『源氏物語』の中君のように男性の存在を認識することがなかった、という点に違いが見られる。そうした違いには、狭衣と女二の宮の実子である若宮の存在が影響を与えている、と考えられないだろうか。この場において狭衣の心を占めているのは、狭衣を頑なに拒む女二の宮と、夜泣きをしている若宮の存在である。狭衣にとつて女三の宮の存在は、かつての垣間見のような、皇女と契りを交わすような行動はとれなくなったという現状を認識するもの一つ、として捉えられているのではないか。

また、登場から卜定までの女三の宮について、本橋氏は、

登場から卜定までの女三の宮は、幼いばかりが強調され、狭衣の恋の対象とはならない。先に侵入した狭衣に気づかず眠る女三の宮を見、また女三の宮がいつでも自分のものになるはずだった存在として認識されるところからもわかるとおり、狭衣は女三の宮は恋の対象とできなかったのではなく、狭衣自身が対象から外すことを選択した女君である。

と指摘している。本橋氏が論じている「女三の宮がいつでも自分

のものになるはずだった存在として認識される」という点は、②にあげた「ありしながらの我なれば、総角もいかがあまし。」という描写や、女三の宮が齋宮に卜定された際の、「大将の御心世の常ならましければ、齋宮齋院世に絶えたまひてやあらしとぞ、人知れず思しける。」(『新全集』①・二七六頁)という描写からも読みとれよう。狭衣の心次第では、女三の宮も女二の宮と同じ状況になっていた可能性はあるが、結果として「狭衣自身が対象から外すことを選択」したことで、齋宮—齋院となる源氏の宮も含めると、両齋王が絶えることなく、齋王制度が維持されるという事になる。

皇女が少ないという問題は、巻二の一条院崩御によって嵯峨院女一の宮が齋院を退下する際に、「代わりに居させたまふべき宮も、このごろはおはしまさざりけり。「源氏の宮の内裏参りや、いかが」(『新全集』①・二七三頁)と語られている。女一の宮に代わって齋王となるべき皇女がおらず、世間は女王である源氏の宮の齋院就任の可能性について口になっている。齋王制度の維持が危ぶまれているこうした状況で、狭衣が源氏の宮や女三の宮と恋仲になっていたならば、齋宮卜定の際に「大将の御心世の常ならましければ、齋宮齋院世に絶えたまひてやあらし」と語られているように、齋王制度が崩壊していた可能性もある。そうした齋王制度の維持に、女三の宮との婚姻が成り立たなかったことは大きく関わってくると思われるが、それが女三の宮の(幼さ)とも結びつくか否かについては、また別の機会に考察していきたい。

狭衣が女三の宮と契りを結ぶことがなかった理由については、

狭衣の女三の宮に対する心情が詳細に語られていない為、幼い様、女二の宮に比べて魅力に欠けるといった理由以外は定かではない。²⁶⁾また、②の寝所の場面については、若宮の泣き声によって周囲の人々が起き出した為、早急にその場を離れる必要があったので、仮に契りを結ぼうという思いがあっても状況的に困難だったのではないだろうか。そうした、女三の宮自身の幼さ、女二の宮の存在、慌ただしい状況等の理由から、狭衣は女三の宮と関係を持つことがなかったと考えられる。

おわりに

本稿でとりあげた巻二の場面における女三の宮の幼さ、幼稚性は、源氏の宮を至上とし、女二の宮を優れた女性であるとする狭衣の視点、価値観のもとに語られた姿であり、彼女の本質を捉えたものであると言いたい。しかし読者の目に映るのは、そうした狭衣の視線、心情を通して描かれた女三の宮の姿である。狭衣の視点から女三の宮像が語られることに意義があるとすれば、どのような見方が出来るのだろうか。

「心幼し」と語られていた今姫君と飛鳥井の女君について今一度確認してみると、今姫君の場合は、語り手の視点から、姫君を取り巻く環境ゆえに備わった性質であることが語られていた。

そして、飛鳥井の女君の場合は、狭衣の素性や女君の苦悩を知らぬ乳母の視点から、道成を拒むその真意が理解できないという状況下で、「心幼し」と評されている。彼女達に付与される「心幼し」という性質は、その理由付けが丁寧になされていることがわ

かる。一方、垣間見場面において語られる女三の宮の「幼びて」は、子供らしい欲求のように思われるが、噂にあがる男性の絵姿を見たいという女性としての好奇心も混在していた可能性もある。姉妹を初めて目にする狭衣の視点であることを考慮しても、そうした会話から単に「幼びて」と評してしまうのは、やや無理があるように感じられる。具体的な理由付けがなされずに幼い皇女として位置付けられているのは、彼女の傍らに、落ち着いた佇まいの気品ある女性・女二の宮の存在があり、相対的に女三の宮の言動が幼く見えるという効果の表れではないか、と本稿は考える。

寝所の場面においても、狭衣の視点から、男の侵入に気付き苦悩する女二の宮と、気付かず熟睡する女三の宮の比較が行われている。『源氏物語』の薫と大君、中君の構図を踏まえつつも、中君のように目を覚まし、男性と相対する場面は描かれていない。狭衣にとつては、女二の宮や若宮と共に生きることの出来ない状況への嘆きが重要であり、女三の宮の幼さ、幼稚性も、かつての女二の宮との契りを想起させ、あの頃のように振る舞うことの出来ない狭衣自身の境遇を浮き彫りにするものである、と捉える事が出来ないだろうか。

また、女三の宮と契りを交わさなかったことが、後に語られる「大将の御心世の常ならましかば、斎宮齋院世に絶えたまひてやあらまし」という語が示すように、斎王を絶やさなかったことに繋がるのであれば、女三宮の幼さは、斎王制度の維持や、天照大神に憑依される斎王の資質といった問題とも無関係ではないよう

に思われる。さらに、託宣以降は女三の宮の姿が描かれない事にも、彼女の有する幼さ、幼稚性といった性質は関連しているのではないだろうか。斎宮の任を狭衣帝即位とともに終えたとすれば、後に彼女が担う役割は、若宮の姉、前斎宮といった立場で若宮の後見を務める事であろう。女三の宮が若宮の確固たる後見役となる為には、幼さ、幼稚性は不要のものとして、消失していかなるをえないのではないだろうか。そうした、女三の宮の幼さ、幼稚性が作中を通して担っている役割についての考察も、さらなる課題としていきたい。

注

(1) 本稿に引用した『狭衣物語』の本文は、深川本を底本として、いる『新編日本古典文学全集』を参照し、異本系統の確認では、第一系統は『日本古典文学大系』、第二系統は『狭衣物語全註釈』の第二系統部分を、第三系統は『日本古典全書』と『新潮日本古典集成』（以後、『新全集』、『大系』、『全註釈』、『全書』、『集成』とする。）をそれぞれ参照した。

(2) 第二系統・為家本の本文は、『狭衣物語全註釈』I（狭衣物語研究会（三谷榮一・酒井みさを・山口雄輔・井上眞弓・鈴木泰恵・南昇）編、おうふう、一九九九年）より引用。

(3) 『日本古典全書』上（松村博司・石川徹校註、朝日新聞社、一九六五年）、『新潮日本古典集成』上（鈴木一雄校註、新潮社、一九八五年）

(4) 子供に対する表現、狭衣や源氏の宮など、作中人物の幼少期を指す場合に「幼い」という語が用いられていると確認できたのは、二十二例である。

(5) 『新編日本古典文学全集』二九（小町谷照彦、後藤祥子校註、

小学館、一九九九年・二六四頁。

(6) 前掲注3 『日本古典全書』上・三五六頁。

(7) 前掲注3 『新潮日本古典集成』上・二二〇頁。

(8) 前掲注5 『新編日本古典文学全集』二九・一〇一頁。

(9) 「看督の翁率でこれ開けさせん、など言ひけるけしき、別当殿の御子の蔵人少将とぞ思はせたりし」(『新全集』①・八七頁) という女房の会話から、蔵人少将ではなく他の身分の貴公子である事も推測しているように思われるが、中納言であるとは勘付いていない事がうかがえる。

狭衣の従者たちの高圧的な振る舞いに怯え、通いの女房たちがいなくなってしまう事、身分も明かさず経済的援助が期待できるかどうかも定かではない事などから、乳母は狭衣の事を快く思っていない様子である。

(10) 前掲注5 『新編日本古典文学全集』二九・一五一頁。

(11) 『狭衣物語全註釈』Ⅱ(狭衣物語研究会(三谷榮一・山口雄輔・豊島秀範・南昇・太田美和子・岡田広・神田久義・山本真理)編、おうふう、二〇〇七年)・三四三頁。

(12) 前掲注3 『日本古典全書』上・二七六頁。

(13) 前掲注3 『新潮日本古典集成』上・一一〇頁。

(14) 『狭衣物語全註釈』Ⅳ(狭衣物語研究会(豊島秀範・太田美和子・南昇・石渡健児・竹内佑希・神田久義)編、おうふう、二〇〇九年)・九九頁。

(15) 本文は『日本古典文学大系』七九(三谷榮一・関根慶子校注、岩波書店、一九六五年)、前掲注14 『狭衣物語全註釈』Ⅳ、前掲注3 『新潮日本古典集成』上、より引用した。

(16) 前掲注14 『狭衣物語全註釈』Ⅳ・九九―一〇〇頁。
なお、垣間見される姉妹、男性を拒み逃れる姉と熟睡する妹という構図についても、『源氏物語』の大君・中君姉妹の描写

との類似が、本橋裕美氏によって論じられている。(本橋裕美『狭衣物語』の斎王・斎内親王・女三の宮の位置づけをめぐる一考)、『狭衣物語 空間/移動』、井上真弓・乾澄子・鈴木泰恵編、翰林書房、二〇一二年)

(17) 植田恭代『源氏物語』における催馬楽引用―「東屋」巻の場合―(『中古文学』第四十三号、中古文学会編、一九八九年五月)、五四頁・表1 物語文学にみる催馬楽楽曲名対照表より、飛鳥井が一例、更衣が二例、角総が一例引用されている。こ

とが指摘されている。

(18) 前掲注17植田論文。

(19) 『日本国語大辞典』第二版(小学館、二〇〇〇年)より。

(20) 前掲注3 『日本古典全書』上・四三七頁では、「あげまき」は古への子供の髪結び方の一つでもある。そこで、まだ幼年の女三宮の寝姿から、この歌を想起したものと指摘されている。

(21) 中田幸司氏は、男子の髪型説として、賀茂真淵『催馬楽考』、橘守部『催馬楽入文』をあげている。(中田幸司『催馬楽』「総角」攷―『神楽歌』との連続性―、『平安宮廷文学と歌謡』、中田幸司著、笠間書院、二〇一二年 初出『平安朝文学研究』復刊第十二、平安朝文学研究会編、二〇〇三年十二月)

(22) 前掲注21中田論文。

(23) 前掲注21中田論文。

(24) 前掲注16本橋論文。

(25) 前掲注16本橋論文。

(26) その他、狭衣が女三の宮と関係を持たなかったことについて論じているものとしては、『全註釈』(前掲注14 『狭衣物語全註釈』Ⅳ・一〇〇頁)の、

大君を一途に思う薫は、大君が中君を残して身を隠した折

りに、中君と契らなかつた。『狭衣物語』でも、女二の宮に逃げられた狭衣は、女三の宮と契らない。狭衣の場合、自己の軽はずみな行為が女二の宮と亡き皇太后宮を苦しめたことへの反省から、昔のように振る舞わないのである。「女二の宮と亡き皇太后宮を苦しめたことへの反省」からなのかは明確に描かれてはいないが、女二の宮に拒まれた事や、女二の宮に比べると女三の宮はやや魅力に欠ける面が描写されている事が関係している、と見てよいのではないだろうか。

(27) 齋宮退下後の女三の宮の重要性については、本橋氏によって指摘されている(前掲注16本橋論文)。

本橋氏は、母のない若宮にとって女三の宮は重要な庇護者となること、若宮立太子という微妙な局面にあつて女三の宮が齋宮の任を恙なく終えることは不可欠であり、「後を見越しても若宮の支えとなる女三の宮を欠くことはできない」とした上で、「若宮立太子、そしてその後、東宮の立場を保つための要」であると論じている。

(しおみかな 大学院博士後期課程在學生)